

2009年度 第1回島嶼共生系学際研究環ワークショップ報告

【開催日】2009年10月10日

【会場】伊豆大島 大島支庁会議室

【テーマ】島嶼共生系とは何か？

【プログラム】

1. 趣旨説明（可知直毅・首都大学東京）
2. 参加者自己紹介
3. 問題提起（湯本貴和・総合地球環境学研究所）
4. 課題整理
5. 課題検討

【出席者】

学外

湯本貴和（総合地球環境学研究所 教授）
吉川泰弘（東京大学大学院農業生命科学研究科・教授）
手塚賢至（ヤクタネゴヨウを守る会 代表）
長嶋俊介（鹿児島大学多島圏研究センター 教授）
伊藤秀三（長崎大学 名誉教授）
山上博信（日本島嶼学会 理事）
加藤明（株式会社計画技術研究所 研究員）

学内

ダニエルロング（人文科学研究科 准教授）
菅又昌実（人間健康科学研究科 教授）
村上哲明（理工学研究科 教授）
可知直毅（理工学研究科 教授）
黒川 信（理工学研究科 准教授）
沼田真也（都市環境科学研究科 准教授）

事務局

坂本尚子（理工学研究科 リサーチアシスタント）
近藤日名子

【概要】

1. 趣旨説明

首都大学東京は、「空間的に限られた生態系の中で、人と自然が持続的に共生するための文化的、社会経済的、自然的条件」を実証的に研究する新学術領域の確立を目指し、島嶼共生系学際研究環を組織した。本ワークショップでは、「島嶼共生系とは何か」について、意見交換し、課題を整理する。

2. 問題提起

2.1 島の特徴

- 本土からの隔離の程度にしたがって、独自の自然と文化をもっている。
- 面積は狭く資源に限界があり、環境変動に脆弱である。
- 開発の遅れにより自然や文化を良好に保全されてきたが、一方で社会資本の整備が遅れ、深刻な過疎問題に直面している。
- 過疎や生態系問題や外来者移入が、文化の継承などに大きな課題となっている。また、外来種の移入が固有の生物相を脅かしている。
- 観光で成功している島では、過剰利用、ゴミ処理、トイレ問題等の環境問題が起こっている。

2.2 「環境の世紀」における「島」の意味

- 環境負荷を低く保ちながら豊かな生活を目指す必要がある。
- 島という環境には、限られた資源をうまく利用する知恵と社会構造があり、私たちはここから学ぶ必要がある。

今必要とされる「島」の研究

1. 固有の価値の発見と発展的継承
2. 自然資本の再生・強化
3. 「環境負荷が低くても、豊かな生活」という、メッセージの発信に貢献
→省資源・省エネルギーの知恵の発掘

2.3 モデル化に向けて

- その島がどのような島なのかを位置づけるためには、自然要因（島の大きさ、本土からの距離、気候帯等）、社会要因（人口、経済力（自治体の財政規模）等）の整理が必要となる。
- 自然要因、社会要因がそれぞれの島を考える場合の「相対座標」となる。
- モデル化をする際に、「相対座標」は常に頭の中に入れておかななくてはいけない。
- 国境や 200 海里といった地政学的要因は、特殊な島を考える場合の絶対座標となる。

3. 課題整理および課題検討

3.1 各研究分野の新学術領域における立ち位置について

- 明確な共通テーマを持つことが成功のもとである。それが難しい場合、空間情報あるいは時間情報を統合し蓄積するツールを考えることが有効だろう。
- 新学術領域を確立していく上でのぶれない方針として、「島を知ることは都市を知る上で鏡となる」ことが挙げられる。
- 情報のギャップが埋まってきているということを考慮に入れた研究領域が出来てくるだろう。
- QOL (Quality Of Lie) は新学術領域における最終的なゴールのひとつとなるだろう。

3.2 島の将来のための研究について

- 一般市民・島民との関わりの中では、専門的な評価をわかりやすく伝える必要がある。
- 活性化と環境保全のバランスをどうとっていくかをもとに、全体像と暮らしのレベルの積み上げを見ていく必要がある。
- 島の持つ独特の完結性を追求すると良い。
- 研究者は島の価値を言葉にして発信してほしい。
- 観光客の目をひくためには物ではなく物語を作り、それを発信していくことが重要である。
- 固有性の危機に関する研究は理解を得やすい。
- 産業基盤のない島は、援助、移民、仕送りに代わる代替案を求めており、これは新学術領域で解決する問題である。これらに対応するために必要なことは、組織の作り方と教育、そして国外と結びついた情報やリソースの獲得である。
- 島が大きなインパクトを受ける前に、社会的アセスメントを行うことも新学術領域が扱うべき問題である。
- 人口は大きなパラメーターとなるため、人口と QOL についてシュミレーションしてみることは非常に具体的で学際的なものとなるだろう。
- 生命に関わる問題において、情報システムの確立が必要である。
- 島のニーズが変わった時にどう対応するのかを考える必要がある。ひとつの方法として、政治的な方向性に左右されない社会基盤 (QOL) に焦点をあてることが挙げられる。
- 外来に対して強い社会をどう作るのかが重要である。
- QOL を考えるうえでは、その島の何が良い点で何に満足しているのかを把握することも重要だ。

3.3 その他考えられる課題

- 「島が変わった事象を研究したい」ということが、島の人を傷つけることが起こり得る。その島が自分の研究部門にとって非常に重要であるということを伝えながら、誤解を受けないようにすることはとても大切だ。各研究分野でそのようなことが問題になるのか、問題となる場合、それをどのように解決していくのかを考える必要がある。
- 「共生」をどのような英語表記にするか。

- 島で総合的な研究をするためには、「人と自然」、「人と人」、「人とモノ」、「人と仕組」というそれぞれの相互作用を捉える必要があり、その全てをカバーできるような組織作りが必要である。
- 島の活性化には、1) 島民の健康、2) 人口の年齢構成、3) テーマスペース構想、4) 魅力的な島づくりという4つのキーワードが挙げられる。
- フィールドをどこにするのか（特殊な場所か、地方都市に近い場所か）をはっきりさせる必要がある。
- 持続可能な地域作りや地域の活性化のためには、事業を島自身が運営していくための、地域の体力作りが課題となる。
- 地元大学が果たす役割は重要であり、努力が必要である。
- 島同士がつながるような活動をすることで、ひとつのリソースを共有することができる。島のつながりには潜在的なニーズがあり、それを活性化させることが求められるだろう。
- 情報を整理し、それを島に還元する作業や組織、仕組みが必要である。
- 島を活性化させるうえで、島の独特の豊かさを活かした商売をするために、商学・経済学の専門家が必要である。

4. 感想（錦織一臣・大島支庁総務課長）

- 島の特徴として、人口組成におけるかなりの部分を公務員（行政）が占めているということが挙げられる。
- 社会経済的、自然的条件な面において、大きなプレッシャーを与えているのが行政であり、行政が果たす役割は無視できない。行政の側面からも考えることができれば意味は大きい。
- 島では宗教の影響も大きいと思う。

5. その他意見メモ

- 島には、Insular syndrome（島の症候群）という、島であるがゆえに起こる共通の事象があると言われている。
- 島を対象とした研究をするには研究者の視点と島民の視点の両方が必要であり、島を実験場と言ってはいけない。
- 事業を頓挫させないためには組織化をすることが重要であり、また継続的に島との関わりを持つことが必要となる。
- 組織構造に大学を入れると、組織が年を取らずに絶えず新しく動いていくことができる。
- 島に対する姿勢と眼は、島民として島を見るか、大陸から島を見るのかによって異なる。
- 自然資源が資本となる島では、研究者の蓄積が島の価値の認識に果たす役割は大きい。また、エコツーリズム（ツアーガイドの質の維持）にも大きな役割を果たす。
- 島民の島に対する関心の様は、島ごとに特徴がある。
- 個人あるいはグループの研究成果が島に変化を起し、また研究者自身がそこに生活の場を

おけるためのサポート体制が地域にできてくる。このようなことも、島嶼における研究者を含んだ共生の在り方かもしれない。

- 各分野が研究を深めることが島に貢献することに通じる。
- 島が何を目標に掲げているか（開発か、保全か）は島それぞれであるが、目標によって、やりやすい面は出てくるだろう。
- 島の場合、その学問の中身はわからないが、その場所については知っているため、共通のアーリーナが出来やすい。学際的なアプローチを学生に学んでもらうには良い場だ。
- 学生を島に連れていくことで学生の教育ができるだけでなく、学生を通じて島と新しい接点ができ、また観光客の目を考え直すことができるといったメリットが生まれる。
- これまでの、文系および理系における「島」の認識を重ね合わせることで、さらに島がよく見えるだろう。
- 山村におけるケースも「島」という視野に入れて良いのではないだろうか。
- 宅急便などの物流の研究が島の活性化に貢献するだろう。